［課程―2］

審査の結果の要旨

氏名　　西　垣　(岡　﨑)　　佳　織

本研究は、在宅重症心身障害児を対象としたレスパイトケアを主介護者が利用することに関連した要因を明らかにするために、質的研究と量的研究を組み合わせて行い、下記の結果を得ている。

1. 質的研究によって、在宅重症心身障害児の主介護者のレスパイトケア利用の関連要因を系統立てて明らかにした。
2. 量的研究により、在宅重症心身障害児主介護者のレスパイトケア利用は十分には行われていない実態が明らかになった。
3. レスパイトケア利用希望の促進要因として、児にきょうだいがいること(オッズ比=2.76［95%信頼区間：1.01-7.57］)、児の性別が女であること(オッズ比=3.26［95%信頼区間：1.13-9.36］)、社会サービス利用が児の楽しみになると思うこと(オッズ比=4.15［95%信頼区間：1.43-12.06］)、社会サービス利用に家族が賛成していること(オッズ比=4.67［95%信頼区間：1.68-12.99］）が明らかになった。
4. レスパイトケア利用の促進要因として、通学でのレスパイトがあること(オッズ比=3.51［95%信頼区間：1.19-10.31］)、社会サービス利用に家族が賛成していること(オッズ比=4.22［95%信頼区間：1.46-12.18］)、自宅の近所に社会サービスが存在すること(オッズ比=3.03［95%信頼区間：1.18-7.81］）が明らかになった。

5. レスパイトケア利用量の促進要因として主介護者の介護負担感が高いこと（β=0.26, p=0.04）が、阻害要因として主介護者が就業していること（β=－0.31, p=0.01）、配偶者がいること（β=－0.54, p=0.00）が明らかになった。
6. Andersen モデルを概念枠組みとして利用希望・利用・利用量の関連要因を明らかにしたことで、小児を対象としたレスパイトケア利用促進への示唆を得た。

以上、本研究で、在宅重症児主介護者の社会サービス利用希望、利用有無、利用量の実態と関連要因が明らかになった。障害児の中でも主介護者に特有の負担がある重症児に対象を限定し、児と母親が離れる時間をもつことが可能な社会サービスであるレスパイトケアに焦点を当て、レスパイトケア利用による児へのメリットを主介護者が認知すること及び、家族がレスパイトケア利用に賛成していることが、レスパイトケア利用を促進していたことを、新たに明らかにした。本研究では、レスパイトケア非利用者も対象に含めたこと、さらに、利用希望を有する主介護者の、実際の利用有無及び利用量について検討したことによって、主介護者にとって適切なレスパイトケア利用の関連要因について検討することができた。

その結果、これまで未知であった、医療者から主介護者に対する、レスパイトケア利用促進への関わりについて重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。